

短歌 (投稿順)

来んでイイ流行り廃りで下すなら我が行く道は我のみぞ知る
 分断の国際社会の現状は頭首会議の行方如何にと
 早起きし朝飯前のランニングしたいと思ってもう一眠り
 嬉々として粉を散らして餡包み孫と楽しむ大福つくり
 恒例の町のイベント健康診断身長二ミリ毎年縮む
 山鳩の山椒の実を啄みて一粒噛めば我降参す
 秋の雲翌翌見れば面白く東にゴジラ西に犬居て
 蒔かぬのに芽生えし胡瓜に手を遣れば実をつけ初めときめく朝あさ
 報道のモロッコ地震その後にはピア洪水見て落ち着けず
 孫夫婦に寄せ植えの花頂きてこころ温む敬老の日よ
 ふるさとの八幡さまの秋祭り声かけくれる人いてうれし
 昼寝する義母が使いし籠枕唼くはきて眠り覚めくや
 四年ぶりかさばこ引いてふるさとの祭り賑わいみんなの笑顔
 すまんぢゆう惜しまぬ手間で出来決まる一日がかりで今日は先づ先づ
 羊雲群れ浮かぶ空山峡の道行く子らの熊鈴は鳴る
 文化祭片づけ友と庭花火はじける色に話も尽きぬ

皆野 石原 達也
 三沢 眞下 杏子
 三沢 新井 叶子
 皆野 萩原 初恵
 皆野 戸塚喜久雄
 三沢 新井 民子
 下田野 新井 節子
 三沢 新井 叶子
 上田野沢 四方田利男
 下田野沢 浅見 豊子
 三沢 眞下 杏子
 国神 藤原マキ子
 皆野 村田ハツ代
 皆野 引間 万亀
 皆野 打木 昭廣
 皆野 太幡琉美花

俳句 榎本順江 選 投稿数 17句

栗飯の古木の精を戴きぬ
(俳)相当な年月を経ている栗の木が未だに実を付けている。古木の生命力を思いながらの今日の栗飯。木の力も実のおいしさも含めたこの上ないごちそうです。古木に寄せる作者の思いが詰まっています。夜の露により、校庭の白線が際立ち、何気ない校庭の景が、躍動感ある校庭になりました。三句目、今や探査機が月へ到達する時代ですが、月は変わらず煌々と美しい光を届けてくれます。作者は光の中に佇み、しばし名月との語り合いでしょうか。中七の表現が見事です。

三沢 新井 民子

校庭のライン浮き立つ白露かな
 皆野 小菅恭青史
 月今宵雲にしばしを遊ばるる
 皆野 引間 千鶴

名月や睫毛の先に光降る
 皆野 太幡琉美花
 青空や越え行く尾花の峠道
 皆野 戸塚喜久雄

ねんねこに思い出深し糸を解く
 三沢 新井 叶子
 秋日傘菩提寺へ坂登り行く
 国神 藤原マキ子

誕生日の曾孫と祝いわがれ敬老日
 三沢 眞下 杏子
 ペダル踏み山坂越えて男郎花
 皆野 鳥 弘

邪気払いなどと称して温め酒
 皆野 石原 達也
 古い二人暮らす庭隅曼珠沙華
 下田野 新井 節子